

て絆を形成し、子どもを養育できる点が他の動物とは違う特質であろうかと思えます。また、家族や親子の絆というのは自らも生きながら自分の特質を活かして他の成員もより良く生きられるように配慮していく事、相互に信じ合い、大切に思う関係にあると定義できるかと思えます。昨今、この関係が非常に弱まっていると言われていますが、時にはそれを代行する社会的な養育システムが必要になってくる訳でございます。

心の居場所というのは、自分が時間と空間と人間関係の網の目の中に独自の自分の居場所を持っているというメタファーであり、決して「場所」という言葉から連想させる空間的なものだけを意味している訳ではございません。

まず、一つには『空間としての居場所』が考えられます。居住空間としての自分の場所が適切に保証されるということは、当然子どもの発達や精神状態に応じた場所のあり方が考えられていなければなりません。例えば普段子どもさんがどんなふうに暮らしているか、子ども部屋の様子を見ることなどで知ることでも大事です。非行化した子どもさんの場合、親御さんがほとんど子どもの生活の実態をご存知でなく「そんな事はない」とおっしゃる方が多いのですが、反対に子どもの程良い自立を促していくためとはいえ、いつも監視していることではなく、子どもの力の成長に応じて子どもの住んでいる空間にある種の自由度を増していくということも必要かと思えます。

二つ目には『時間感覚としての居場所』ということがあげられます。自分の自由に使える時間や、思い描ける未来としての時間を持つことは大事です。学校・施設や集団生活の中では制度化され皆で共有化された時間を過ごす事が多いわけですが、その一方で自分が工夫して大切に使える時間を持つことも、人の心の成長や治癒には非常に大事なものだろうというふうに思われます。

次に『社会的な空間』です。これは、自分という人間は、親子・家族・近隣や地域社会・あるいはこの世の中にちゃんと関係を持てているのか。人間関係の網目の中にどういうふうに位置づいていて、そこにちゃんと自分の居場所があるかどうかということが非常に大切になってまいります。多くの場合、いろいろ心に傷を負っているお子さんというのは非常にもろいわけでございますけども、自分が本当に誰から生まれた誰だかわからない・親を知らない・その後の生活も一貫して辛い被害を受けるものだけだったというふうに、平素ずっと考えて暮らしていた方に、今後全く可能性がないかと言いますと、あまり早々と「この人は非常に重篤で状況が非常に難しいから」と諦めないということが大事ではないかと経験的に考えます。これは本当に小さな点であっても、ある人の中に自分の居場所がある、それも現在は継続していなくてもある時間あの人の心の中に自分は生きたということが「種」になって、それから急成長が起きてくるのではないかと思います。たとえ短い時間であっても、自分のことをきちんと大切に受け止めてくれたという相手や状況があったという実感を心理的な援助関係の中で、その「種」を見つけることが出来ると、それを素に人は成長・変容していきます。

子どもの心の居場所に影響をもたらす現代文明の光と影でございますけれども、現代では大量の情報が実感を伴わないで手に入ります。叡智とか知恵というものは自分の身体の中をくぐって生き生きとイメージでき、実際の生活の場でこういうふうに表すものということが分かった時に本当の叡智や知恵になるのですが、今は疑似体験でバラバラの知識が与えられ、調べたり気がついたり創造する喜びを薄れさせ、結果として言葉が貧しくなります。私は現代、子どもも大人も行動化することが増えたと思えますが、言葉が貧しく、思考力や想像力が乏しいことが基本的な原因ではないと思えます。